羊詞

加様なる悪いが賀國とり一乃
内衆なる桜も未然蓋強内中
不知なるをば所ふまちが判官
殿十二人乃内くわ山仕と称て
奥へ住下向の由新朝や尼乃祈
國くる新関を立て山伏を望く
撰ひ中せとの仕事まそくんだ召

此所を承て山伏をとゞめん
申候ぞねもごろに申付けばやと
如何に誰かある　御前に候
今日も山伏の通りあらば
此方へ申へ　畏て候　旅の
衣は篠懸乃旅の衣は篠懸の
露けき袖や志ほるらん

鴻門楯破れ都乃外の旅衣
日も遙々の越路の末思ひやる
こそ遙かなれ伴ふ乃
人々伊勢三郎駿河次郎
片岡増尾常陸坊弁慶は
先達乃姿となりて主従已上十
二人ぞ未だ習はぬ旅姿袖乃

篠懸露霜をはらふ袖て旅乃
枕星も明きやしる宵の越路の
越よ急くあは時しも頃は
二月のきさらぎ乃十日の
夜月の都を立出てゝ是やこの
行も帰るも別れては〱知るも
しらぬも逢坂山かくす霞そ

春はうらめしき〱浪路遥に
行舟の〱海津の浦に着にけり
かゝわ東雲はやく明ゆけば浅茅
色づくあらち山気比乃海宮居
久しき神垣や松のきのめ山猶
行先にみえたるは杣山人乃
板とり川瀬の水乃浅生津や末そ

三国乃みなとなる蘆の篠原波
よせてなびく嵐乃はげしきは
花の安宅につきにけり

シテ詞
いかに申上は暫く此所小休やいられん
あらふしぎなる人　ヨミ字　いかに弁慶

シテ
御前には　たゞ今旅人の申て
とをりつる事を聞てあるか

シテ
いやなにとも承り候はず

ヨミ字
安宅の湊に新関を立て山伏を
かたくえらみ申とこそ申つれ

シテ
言語道断乃次第にて候去ながら
さてハ下向を存て関を立て候は
まさしく存る事を遂く候
大事なくは先此所にて暫時く

は譲れるまゝ此ひるまんぞ老
一大事乃手ゆくは留ぶとん中
のとをまを此吳見あしふる
まゝは　動かり　ッと　んの中まは明祖
乃手のんきぶうちやゆはう
は毎まあまし　ッ　なは　ッテ　は
ぶ行ちまは毎一は打被ぶて

は通まはふふひるを家手ゆく
んとともぶ出ん山むり赤り
は大手まはぶ明ともして
まの俗の俗へうりひると
なは　ヨミま　兎も角も弁当をうひ
んへ　ッテ　最ては業きつ也業し
ひまをるを乃俗ぶかを始て

ぬしとなつかしい山伏りうしん
ぼとけとなりもせぬ海道に座なくは
百姓はしらぬ人ばかり
多さとなりゆくうしん大ぜい藤無を
肩にかけ有神にてば笠を源こと
めさまどうふも多の所にはかまく

わまてくらわあるとこるに所家
時雨をいりぐ伊ぐく人を思ひも
しるとまきまきとあい　実はい
むしまくんさくれた藤無を取くん
三韻
是はいづる強力ぬり笛をせ肩に
をのぬくるハなんはうぬかも
なるとくるとくるなるより先ぬえ

と奏へりけんで関の横林をひん
曲る山伏を拝ふ
なきり恐ふうてきたりん
（ソカシ）
（ミテ上京）
見てん　きりのはい薄生り
ここ　ここ　日
柱なる隠なり　強力はよも
日をうけしとば線無を脱語て
ここ　ここ　ここ
（ミテ）
成乃衣をは力ふ　あり
（ヨミ）
強力の負たる箱を　よりて
（ヒル）
とはて肩ものを　箱ゆ上ゆ
面皮彩筆を付て　猿蓑を
日
（ミテ）
（上月）
新をかく　笠風杖ゆ
強力りて
以ふ
ゆ強力
（ミテ詞）
ゆ強くとして　あゆ人たのふ
ここ　ここ
はを横り痛りて　ふかより

あとふりさけて出あるふ
りるまくまくまくは皆くは通至
くへ　ぢは　ぢかに　ぢふ中は山仕の
失敗仕と我至く　　詞　　詞　　ぢと山伏乃
山通至ある此中りは仕てあ所
ぢふくぢ皆通是ハ関くは
通ぐぢい　南部東大当の通立ぢ
詞

為国くへ文俗を仕ぢうハ文飛く
ぶ法ぢと仕ぢ皆俗ぢりは仕て所
通至くぢ先勧ぢ法の　　詞　　仕法
弾勝ふく勧ぶ仕戸ぢふ仕る
ぢくは出なくぢぶ是ハ山仕ぢる
仕法ぢとあ中関ゆくる　　詞　　梅雪
謂ハは　　詞　　ぢ安は彩義仕中

不知り彫りをたなのふるよりわ
ゐ家屋ハ奥秀湖をを通ミたまひ
ぎ二人のきくわ山伏となりて
ぎ下向乃由をゆうえんなる國くふ
家屋をうてう山伏を望く拝ひ
ゆをとのはるうまうんぎ所ゐ
山所を住家ゐはるじ山伏をとゑ

ゆはざるゑ先のそ失物はを座人ゐ
一人もとなゆゆゐ家ハ（ミテ詞）家田
ゐんぐう物をはくゐ山伏をさう
とゑよゆゐ作伏ゑ飛ハひつゑめ
よもきゆ山ゆをとめゆとゑ
作ゑ物人ます（ミカニ）ゆやきのふも
山伏を三人まのきつゑはとハ

枕をきつゝ仏山仏ハ者共殿り
ゆゝしきの一やゐ共い毎益
一人もとなゝ中まひ上老ハ
きゝ共ふなもは見ゝ妹さゝ祇
ハりむひゝ所　中ゝの
言葉さゝり歎、不祥なる所へ
来りゝはゝゝもゝかゝはゝとい力
及ゝぬゝゝゝゝた実ハ乃勤めを
初て是常り祇さゝ神うひる
ゝゝゝ　所ハ　皆ゝ仏ゝ海ゝ
ゝゝゝゝゝ実後の法とゝめ浅
ハゝめゝゝゝ仏とゝ法ゝ殺乃
優婆塞ゝ行俗を家者　ゝ力是
不動明王の家をゝとわ

ミテ上
頭巾と云て玄番乃寮冠なり
日
十二国部のひと毎をけへて裁き
ミテ
九品蓮葉乃形の篠紙　脇絵
黒色のはくぶ紙　ミテ　相まつる
日
やはめ結わく世法華　八葉ぶ
蓮花をふまへ　ミテ　出の色
日
阿吽乃二字を少なへ　長四
ミテ
長仏乃山伏を　袈裟と討と見
日
殺りなる　四方の巡礼とわ
ミテ
ちう　五野　権現乃法りたを
日
あつる世事　立山をけて
上日
物をへ　ミテ　俺阿異羅吽欠
ト
世数珠とく　とをもめは
早詞
仏法弥勝ふ山さ寿小道ひ

候へば南都東大寺の勧進と仰
せ候ひつれば定めて勧進帳の
御座なき事は候ふまじ勧進帳を
遊ばされ候へ是にて聴聞
申さうずるにては　シテ詞 なかなか
勧進帳を讀とゝや心得申候は
地 もとより勧進帳はあらばこそ

笈の中より往来の巻物一巻
取出し勧進帳と名付つゝ高らかに
上カル こそ讀上けれ それつら〳〵
同 おもんみれば大恩教主の
秋の月は涅槃の雲にかくれ生死長
夜のながき夢驚かすべき人も
なし爰に中頃帝おはします

[illegible]ぬるを皇帝と申付をわ
[illegible]宮殿の婦人ゐまつりて悪業やえ
[illegible]ゐまつりて涙流服ゐまつりて涙血を
[illegible]ぬく思ひを長連ゐ歎して
[illegible]慶遮那佛を建立ひらげほとゝ乃
[illegible]霊場乃殿なをすをかなしつゝ
[illegible]後京坊流源法国を勸進ひ[illegible]
[illegible]穿鑿乃窟城の業はば浮世ゐそを
[illegible]無法の楽ゐほうるゐ蓮来ゆくは
[illegible]数千蓮花乃まへゐ坐とを開敷
[illegible]響音鼓白と天も[illegible]ひゝけこゐ
[illegible]あ[illegible]ゐ[illegible]ゐ　関のゐ人ゝ所を巻
[illegible]乙をなをてとをゐ[illegible]わゝく
[illegible]ゐ[illegible]ゐたゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ

トモ
いとゝやはあるべき殿ノ法師達は
ロキ詞
さて世なほ強力とまれ世さう
上方ノ詞
いろ〳〵のきみをあやしむる
ご期の浮流きハるとゝぬとゝ那
一回は立帰る　ニテ詞　何ふきりとを
あるとゝまをきゝまうせ以那やあ
四とゝ何の強力をとをしぬる

ヲキ
あまは〻ゝ那ゝこゝろわとめるゝ
ニテ
うゝかゝを四故はとめるう　ヲキ　お流
強力の人は四てゝ殿は梅留て
ニテ
はよ　四也人りひとゝおゝ流
とゝめはゝ　ぬ伝ゝる
梅流はゝてはゝ　ロキ　ヲキ殿は四
なるとゝ者ゝ殿は殿居の召

とゝ丸て作（シテ）り（シテ）と山強力り者
廣ゝ仏たるゝ山や　中ゝ行す
や云語を彩判官殿ゝ仰ゝ下る
強力めゝ一枚の思出那服立や
月たゝ雲間まゝ出ゝ
いくとおりひ法敷ゝ流
笛ふゝあゝにきゝれた方

人もあやしゝ山をまぐ字ゝ出雄
もつゝくゝ吹おりひ法敷小
げゝ物こゝ物ゝゝ飛むゝ笠郎
杖をゝ法ゝ法ゝ教ゝに打擲ひ
ゝ法きゝ方ゝや笛ゝ月をうけ
竹ふゝ笠人ゝ那　奢ハなゝ
ここここここここ
ゝゝゝ強力にゝ力

刀をぬきかけ給ふ所に加藤
清正ひいきの病の至るとゞ
一人の小侍ども刀抜き捨て
にげさりぬ　百姓共にげ出
天満宮神　もがう神法へうう
ろたへ　仕はやまうてい
けやく法華経を唱ん　主詞
を奉る

願を成就し給ふ祈願をわたしは百
度所の聖法やひいきあるべ
きと人びとうけ給わん
びんぼう中上る梅も咲やい給ふ
然ば御ひいきほとゝぎす
たゝきを仕事は百姓とゝ小
二二二二二二二二二二
君の法華ばかりを祈ふまると

ご弁慶は杖をもあてゝ世外ふ
然思へば詠浅猿うきうらん
ヨコツヨ
さるべしやゝくもなぬとなは
げにや弁慶椙も足ぶ乃桜緒多よ
九重ふかなはのからにあらはだ
天の佑か護とさらおりへ関乃
者とも覚を安座一めば漉限ま

凡慮より為すとかくの是非を度
も無爭ひし只眞の下人乃
ごとく散々に打擲して我を
助くるは弁慶がはかりごとふ
あらす八幡の御託宣かと
思へばかたじけなくそ覚ゆる
まず世は末世ふなるといへども日月

月々と地よ後張り張り
りの家方俊なるこたびとしき主
君をうけ杖の兵器署よぎさぬ
ゆやきへ義　実や現主の果城
うるもふ来をしふとりふ事
ぞよきるきそ方乃上にうふを
月の二月やでみ十ねのゝ日乃
雑を通きけるうみきな状
だんなるに十領人数あ乃
覚るふ地しるぐるうひよ面を
ありをけるぐ泥計かる頭う船
志りふ小家張ぐ馬ゑ家よ生神
きんぐを影朝よ主わがりを
西海の波よ志ほめ山野海原小

おきもの所ひ武士乃袋の袖花
まさしく際も浪の上ぎぬ所ハ
舟にうひ風波ゆ力をまうを
ある時い山脊乃馬蹄もつくぬ
雲の中ゆ海ひ入うしあぶゆ波乃
たちぶ音やひ磨ひ石の兜角
三毛の袖も脆く袖をほ弱かり

なひくぶ毛勢も波よがわ
大法敷山ゆ所ゆ上
国果ゆ
りなりまたちう世なれ
ぎまたさひ猫思ひ毛を
樽乃道なぶ人々ぶしひて
後ハひゆまゆ小世ゆあるこて

中

遠寺東南の雲をおこし西北乃
雲霧に要しぬ芳も虎り奔走を
理を鉢ふつき那りぬ浮世中は
神もかとけもましまさぬうや
うらめしやうらめしやあらうら
めしの浮世や　上詞　いまは諸りあはれ
トモ　門前小比　まてとも山伏たち母

顔示なせつ餘よ面目もなく
旗よ道集中酒を一つ気をさう
いろよれやあはれかめハ先へ行て
とめんやへ　トモ　最てくづれやに先
もはや顔守しなさや丁餘よ面目も
なくいとく関帯の先まれて酒を
持せて案らまさる作　シテ　宗悦左衛門

然而後日に恥しけるまゝは
実にこれも心得たり人の情乃
盃に受けて心をとゞむとかや
ことわり何迄てなをく人は
さらに旅郷も神うちはと里
あら恥しめら留郷めでたくも
弁慶はいさめして山伏乃

人やさまさま里と国店して
所も山路の菊の酒をのまふよ
面白や山水に〳〵盃をうかめへ
て流にひかるゝ曲水の手先
さへきる袖ふれていさや舞を
まはふよ弁慶是三塔の
遊僧まひ延年乃時の和哥於

山水の落ていはほに響くこそ

（シテ下）なるは瀧乃水

（ワキ詞）路破て候よ

先達請よ気ふれるよは

（地）さゝ先達の舞

先達一さしまひ候へ

（シテ）

（下）なるは瀧の水　（シテ）なるは瀧乃水

（上）日はてるとも絶ひとまたわく

とく〳〵たてや手束弓の心

ゆるすな関守の人々暇申て

さらはよとて笈をおつとり

肩にうちかけとらの尾をふみ

毒蛇の口をのがれたるこゝち

して陸奥国へぞ下りける